
RVT

kageto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RVT

【Nコード】

N2019W

【作者名】

k a g e t o

【あらすじ】

VRMMOとして発表されたTETORA。不登校高校生 紅葉^{もみじ}は暇つぶしに、とはじめるのだが……。ゲームとリアルの両方で急激に動き出す人間関係と、思い出したかのように追いかけてくる過去。運命に翻弄され、紅葉^{もみじ}は自らの未来をつかみ取れるのか……。

序 全ての始まりから時を経た始まり

序 全ての始まりから時を経た始まり

『Welcome』

機械的だが、女性的でもある声が空間に響く。説明書通りの白い空間に、白いシャツと白いハーパンで立っていた。初回ログインじのキャラエディットだ。

『当ゲームでは性別の変更ができません。身体設定は現在、【リアル】準拠となっておりますが変更されますか？』

「いや、そのままです。ついでに名前設定を。クレハで。紅の葉、紅葉と書いてクレハ」

『了解しました。改めてようこそクレハ。残りの設定を続けます。髪、瞳、肌の色の設定を行います』

アナウンスの声に数秒の沈黙をはさむ。すでに決まっているのだが、変更がきかないらしいので、自分に再度問いかける。大丈夫だな？と

「【リアル】準拠で」

『了解しました。茶色がかつた黒髪、茶色の強い黒瞳、黄色人種特有の肌色。設定しました。最後の設定です。職業を。あなたの思うがままの職業が作れます。もちろんゲーム中に転職可能ですので、スタート時の目安だと思ってください』

ここにきて考える。このゲーム、職業が多すぎるのだ。戦闘系、生産系、娯楽系などなどなど。本当になどをいくつかつけてもき

りがないくらい。

「ちょっと聞きたいんだが、普通のゲームで一般的って言われる職業で、このゲームだと一番人気のない職業ってなに？」

『片手の剣士です。盾を持たないタイプの。盾持ちは逆に一番人気ですね』

それなら決まりだ。そう考える片隅で、もう一人の自分がつぶやく。天邪鬼め。と

「盾なしの片手剣士で」

言うと同時に、ヴンというシステム音と共に腰に剣が装備される。

『武器は初回特典です。それとこちらも』

再びシステム音がすると、シャツの上に皮製の胸当てと手甲、脚甲が装備された。

『これで特典は以上です。ゲームない通貨の支給もありません。クレハ自身の力で稼いでください』

うん。そのほうが燃える。

「ありがとう。あとはまだ何か設定はあるかい？」

『いえ。設定は終了となります。それでは・・・』

アナウンスの声が一拍ためる。

『Good Luck!..!』

その言葉と同時に視界がブラックアウトした。

「予想通り来ましたね。紅葉さま。いえ、プレイヤー紅葉。いずれまた・・・」

第1話 弓士 拳闘士 剣士

第1話 弓士 拳闘士 剣士

暗く暗く、暗い場所。闇の濃淡で辛うじてそこが森だとわかる。並び立つ木々、生い茂る草。深く、静かに、それでいて確かに感じる生き物の気配が、不気味さを感じさせる。

本来であれば静寂が支配してであろう森を二つの影が駆け抜ける。木々の隙間を縫い、生い茂る草と木の根を飛び越え、背後を気にしながら駆け抜ける。そう、逃走である。

影のひとつは女弓士。風にゆれる長い黒髪が特徴的である。弓士を弓士足らしめる弓は弦が切られ、矢筒はすでに空である。

もうひとつは拳闘士。女性的でありながら引き締まった身体は豹のようだ。強さを秘めているであろうその拳は、こと逃走においては役に立ちはない。

弓士はレン。拳闘士はハナ。仮想現実体験型ゲームTETORAにおいて二人はビギナーであった。『超』とか、『ド』とかを頭につけるくらいのはビギナーであった。普段は拠点にしている街を中心にモンスターを狩ったり、街の中での依頼をこなしたりして二人で楽しんでいのだが・・・

「ああー。くそっ！あの商人覚えてろ！次ぎあったら絶対にボコってやる」

「ハナちゃん。死にたくなかったら黙って走る」

簡単に言えば騙されたのである。二人の駆けているこの森、名称

【人狩りの森】等級？。中堅のプレイヤーですら気を抜くとすぐに死んでしまうエリアだ。普段、等級？のエリアでいっぱいいっぱい二人には手も足も出ないのだ。

「レン。魔札は？こっちはストック切れだ」

「閃光 が2枚と 破裂 が1枚。 矢 がきれてるから遠距離は無理」

魔札 TETORAにおいて、魔法を使用する数少ない手段の一つである。トランプサイズのカードに魔法の術式を刻み込んだものである。プレイヤーが意思を込めることで発動するという簡単なものであるが、発動の容易さに反して行使の難しさは並大抵のものではない。魔札の効果は全て単体なのだ。 炎 と 矢 はあるが、 炎の矢 は存在しない。 炎 と 矢 を同時に発動させなければならぬのだ。これに、 追尾 や 分裂 、 巨大化 などを同時発動することで効果はさらに変化するのだが……。魔札の同時発動が難易度の高い技術なのだ。3枚以上となると制御も難しく、魔法使いという職業を不人気たらしめている原因でもある。

「閃光 と 破裂 で閃光弾の代わりってできなかったか？」
「できないこともないけど、手もとではじけるよ」

ようつするに、走るしかないのだ。
チラリと振り返る。迫ってくる漆黒。闇の塊がうごめいている。木々を避け、闇が闇を侵食する。

グルルルルウウウウウウウウ

迫る闇。蠢くそれはモンスターの大量である。この森は探索などに来た人間を奥深くまで誘き寄せ、狩る。群れを成し、並び立つ木

々を巧みに使い逃げ道を限らせる。モンスターであるにもかかわらず、協力し、知恵を使う。人間を狩ることに、エサを得ることに貪欲であるがゆえに特化したのだ。

ビギナーが二人でどうにかなるような、生易しいところではない。知識の少ない二人でもここが等級？や？ではないことがわかる。それゆえに赤字覚悟、アイテムも魔札も装備も使い切つての逃走劇なのだ。

「何が等級？でも下のランクだ！ちくしょう！」

「だから。死にたくなかったら。黙つて。走る」

暗く不気味であつてもモンスターの出ない往路に、ずんずんと奥に行つてしまつたがゆえに出口ははまだ遠い。

スツと駆ける二人に影が併走する。紅。それは紅い男剣士だつた。軽鎧。手甲。脚甲。外套。腰に下げる剣の鞘にさえ紅い装飾が施されている。黒、紅、銀。三色でまとめられた装備。それでも紅が際立っている。

「アレは君たちの獲物かい？」

必死に逃げる二人に比べ、剣士は余裕がある。

「逆だ！私たちが、アレの獲物！」

ハナが叫ぶと、剣士はpeesを落とす。

「なら、俺がもらおう」

「え？」

レンが足を止め、つられてハナも足を止める。二人が振り返ると同時に、剣士が、闇に、飲まれた。

「うそ・・・」

「飲み込まれやがった」

剣士を飲み込んだ闇が進行の足を止めた。

シャアアアン

澄んだ抜剣音。そして・・・

紅一閃

闇に紅い線がはしる。そのまま二線、三閃と紅い線が増え、闇がはぜた。

闇が崩れ、モンスターが地に伏す。そして森に雨が降る。紅い赤い雨が降る。

鮮血の雨の中、たたずむ紅い剣士。

闇の中、実力の差に呆然とする拳闘士

闇の中、何もできないことに唇をかむ弓士

こうして3人は出会った。この出会いが停滞していた物語を加速させる。

第2話 女子高生 二人

第2話 女子高生 二人

三島^{ミツシマ} 雪華^{ユキカ}にとって学校とは戦場である。なにせ勉強ができない。いや、勉強に対する意欲がわかない。というほうが正しい。理解力もあるし、記憶力も良い。事実、テスト前夜の一夜漬けは完璧だし、その後記憶から抜け落ちることもない。親友いわく「小学生みたい」である。確かにそうだと思う。

「なんて事考えてもしようもないか・・・」

呟いて机に頬杖をつく。

「どうしたの？ハナちゃん。ついに頭湧いた？」

心配そうに毒を吐く親友に目を向ける。

北大路^{キタオオジ} 結恋^{ユウユキ}恋を結ぶという名前のせい、運命の赤い糸で結ばれた相手がきつといると本気で信じている、恋に恋する乙女だ。それゆえに親の持ってきたお見合い話を、相手の写真を見ることなく断つたらしい。腰まである亜麻色の髪を最近サムライポニーにするのがマイブームらしい。名実共に超お嬢様。性格は天然。天然過ぎて、時折すらつと毒を吐く。悪気がないから性質が悪い。

「なんでもないよ。ただちょっと考え事してただけ」

「んー。昨日の事？」

そして時々鋭い。

「まあ・・・ね。そこからつらつらと脈絡のない考えたら、何で勉強できないんだろって思ってたさ」

「だからそれは、ハナちゃんが小学生みたいだからだよ。とにかくまずは興味の引くことに全力。勉強は二の次。まさに小学生だ」

「そう言っけどさ。あたしは今夢中になれる物がなかったからさ。勉強ほつたらかすほどのものってあったかな？」

「なかった？・・・な かった。過去形なんだ」

ほんとに鋭い。いや、この場合は揚げ足とるのがうまいのか。

「そこでほら、昨日のが絡んでくるわけさ」

「悔しかったね。自分がいやになる」

そういつて頬を膨らます様がお嬢様だなと思う。

「正しい情報がわからない。逃げるしかない。助けられるしかない。そもそも力がない」

「もっと、もっと強くなりたい。」

そつだ。強くなりたい。負けつぱなしは性に合わない。そもそも戦えないなんてあつてはならない。あつてはならない。

「レン。強くなろう。昨日みたいなのはもういやだ」

立ち上がりかばんを取る。まずすべきことは情報だ。もう、楽し

ければいいからって、行き当たりばったりじゃいられない。

「とりあえず本屋だね。ガイド本に載ってることなんて役に立つことは稀だけど、私たちにはどんな情報も惜しいから」

「その足でファミレス。すぐに読みたい」

「本代は私が出すよ。ハナちゃんの間、新しいワンピース買ってお小遣いきついんでしょ？私今月衝動買いしてないから余裕あるの」

「してないんじゃないかって、近くでする店がもうないんだろ。何で衝動買いで、店のケーキ全種買っただよ。ほんとに女子高生か？カローリー気にしろ」

「どんだけ食べても太らないとか、なんてうらやましい。」

「私より食べてないのに私よりも胸がおっきいハナちゃんには言っただけじゃない。何食べたならそんなになるんだか」

「そんなに見るな。確かにレンより大きいけど……。」

「たわいない話に切り替えながら学校を出る。これからは、熱中できることがある。勉強より何より、TETORAだ。私はここで強くなる。強くなって見せる。意気込んでかばんを強く握りなおした。」

第3話 TETORA

第3話 TETORA

西暦2032年。ゲーム業界は停滞期を迎えていた。タッチパネル。モーションセンサ。端末機。据置機。シナリオ。グラフィック。いろいろな点でマンネリ化してしまったのだ。ゲーム人口の減少とスポーツ人口の増加。世界はゲームを滅びゆく文化だと判断していた。

翌2033年。樹河グループ エンターテイメント部門から、世界を震撼させるゲームが発表された。

VR ヴァーチャルリアリティ。仮想現実だ。 TETORA と題されたこのゲームは、ポットと呼ばれるマシンに入り、軽い催眠状態に誘導し、脳に直接電気情報を送ることで、仮想現実世界にログインするというものだった。

科学が進歩し、過去の人々が夢想した仮想現実よりも、はるかに優れたものだ。各種メディアがそう報じた所以は、五感にあった。 TETORA は、視覚。嗅覚。聴覚。味覚。触覚。その全てを”感じる”ことができたのだ。樹河グループはこの技術に関して、世間を唖然とする発表を行った。

偶然の産物である。と

曰く、医療部門での神経間での電子情報の伝達に関する研究の際に、偶然。本当に偶然、五感の情報を伝達する特殊な波形を発見し

たそうだ。この波形を人工的に作る装置の開発。何千万規模でのプレイを快適に処理するための演算装置の開発などを経ての今回の発表と言うことらしい。それ以上は機密扱いとなり、公表されることはなかった。

そのような不確かなものを使うのか。という世間からの声に、樹河グループのトップにして、樹河一族のトップ。樹河^{キカワ} 柊老^{ヒイラギ}はこう述べた。

「変革とは、革新とは、未知への挑戦だ。変革を恐れ、停滞した世界を安定と嘯き、立ち止まることしかできないのであれば、そのままであればいい。私は。私達、樹河に連なる者は先に行く」

この言葉をもって、TETORA のサービスはスタートした。

TETORA はゲームセンターに近いシステムをとっていた。全国各地にステーションと呼ばれるショップがあり、各ショップ50機から100機のポットが設置されており、年間料金1万円で遊び放題なのだ。

プレイヤーは、自身のホームステーションを決め、基本はそこに通うことになる。ステーション内には、喫茶室や、シャワールームがあり、長期滞在が懸念されたが、最大滞在時間30時間の設定がこの問題を解決していた。

課金アイテムなどが出るのではとの噂もあったが、樹河グループは完全否定。年会費以外にとることは一切ないと断言したのだ。

ゲームの舞台は中世レベルの文化の世界で、言葉こそ通じるものの、通貨、大陸、そして生態系が現実とは異なるものとなっている。何よりも、魔法である。

ゲームの醍醐味である魔法がすっかりと存在していた。が、そう簡単なものではなかった。それが 魔札 システムである。トランプサイズの札に、様々な魔法の発動陣を刻み込んだものである。種類は大まかに分けると、【属性】、【形状】、【効果】、【特殊】の4種になる。【属性】は文字通り、火水風などの属性の魔札。【形状】は剣、槍、弓などの魔力の形状を変化させる魔札。【効果】は分裂、巨大化、強化などの発動した魔法に変化を加える魔札。【特殊】は前途3種に当てはまらない魔札。魔札は2枚3枚と同時発動枚数が増えるにつれ、制御が難しくなっていくのだ。呪文唱えてポン。とはいかないのがプレイヤー達を悩ませている。

そしてなんとといっても TETORA の最大の魅力は、職業システムだ。このゲームの職業は、自称が公称になるのだ。もちろん、剣士や魔法使い、格闘家といった基本職はある。そこから、水魔法使い。とか、蹴撃士といった具合に、自らのスタイルに合った名称に変化させてできるのだ。よって、理論上の職業数は無限なのだ。実際にいる変わった職業を挙げると、雑音詩人（音痴を自覚している吟遊詩人）や、貧血医師（血を見ると気を失う医師）なんてものもいる。

人の数だけ、戦闘スタイル、プレイスタイルがあつて。人の数だけ職業がある。見て、聞いて、触って、嗅いで、味わって出来て、楽しむだけ楽しんで、24時間経っても、現実だと6時間しか経っていない。現実の24時間が TETORA の96時間。現実1日＝仮想4日なのだ。これで流行らなかつたら、世界中の人々のほ

うがどうかしている。

こうして、 T E T O R A は絶大な人気と、膨大なユーザーを獲得していったのだ。

第4話 劫火

第4話 劫火

仮想世界TETORAは現実世界地球に比べ、地表面積は10倍以上とされている。正確な数字は定かではない。というのが、公式の発表となっている。その広大な大地に数多くの大陸が存在している。そのひとつ、森と風の大陸。ウィーダリア。森や谷といったエリアの多いこの大陸の交易の中心地、貿易港アクセム。武器、魔札、道具、人、情報。この大陸でほしいものがあれば、この街に来ればいいということである。

アクセムの中央通りから少し外れた路地に一軒の酒場がある。酒場 灰熊の罫。氷の大陸スニーキアの最難エリア。エリア？【永遠氷の墓標】に生息する、グレイベア。エリア？、？を踏破する冒険者ですら気を抜くと殺されてしまう相手だ。その巨体に似た巨躯のマスターがしずかに経営するこの酒場は、ほかの酒場と異なり、騒がしさを嫌う冒険者の集う穴場となっている。

ただでさえ静かな酒場の、一番奥のテーブル。店内の誰もが近寄ろうとしないその席にクレハは一人座っていた。テーブルには大量の魔札が広げられている。隅っこには同時発動用の固定帯キパーが転がっている。

「さすがに今のままだと、これ以上、上のエリアには挑めないな」

ウィーダリアを拠点にしては見たものの、火属性の魔札を中心にしているクレハには辛いところで、ウィーダリアでは、木と風の魔札は高位の物も容易に手に入るのだが、火は低位の物すら入手に苦勞するのである。

「フレキアスまで魔札を買いに行くのもな……。船代が高くつくしな。いや、それでもいくべきか？」

「あら？めずらしいですね。あなたが人前で魔札を広げてるなんて」

クレハの正面に一人の女が座る。闇色のローブに身を包み、女性にしては高めの170はあるだろう長身。腰まで伸ばした烏の濡羽色の髪。顔立ちも悪くはなく、街を歩けば10人中6人は振り向くだろう。ただし胸が残念だ。・・・残念だ。

彼女の顔を見て、クレハは顔をしかめた。

「そつちこそ、ダリル大陸から出るなんて珍しいじゃないか。面倒くさいんじゃないのか？アイン」

「ふふっ。今回は船は使っていないの。コレ。ようやくできたのよ？」

女 アインはローブの袖からキーパーにまとめられた魔札を手にとった。

「・・・転移」

クレハが震える声で呟くと、アインはそつと微笑んだ。

「属性門転移。私はゲート。と、名づけました。さすがに5枚制御は骨が折れます。それに、精度と安定性を高めるには、もっと枚数が必要ですしね」

「公表するの？」

魔札の組み合わせは、ほぼ無限とあっていいくらいある。プレイヤー達は、自らが発見した組み合わせを掲示板などに書き込むことで、情報の共有を行っているのだ。が、

「まさか。それこそまさかでしょう？だって、この組み合わせ、考えたのあなたじゃないですか。私は単に、あなたより魔札がそろるのが早かっただけ。魔札の制御も未だにあなたに及ばない私では、5枚が限界です。20枚制御なんて発想すら出来ません」

そう、クレハの奥の手は 火 を6枚同時発動で生まれる 灼熱 を、剣に 付与 した上で、さらに 灼熱 を剣自体に 装着 すると言う。【紅蓮剣】。コレだけで14枚。さらに身体強化と思考加速に6枚使用するという、20枚同時制御。10枚ですら困難といわれ、未だに数千万いるプレイヤーの中でも千人ほどしかないというのに、それをはるかに上回っているのである。

「あれは、発想の転換だ。からくりさえわかれば10枚くらいは物の数じゃない」

「でも、その情報は公表しないのでしょうか？それと同じような物です」

さて。と、アインはクレハの手元に手を伸ばす。クレハが使わな

い魔札の山だ。

「先日、あなた【人狩りの森】に入ったでしょう？あのエリアだと・・・。影と闇 かなり出てますね。30枚ですか。これ、全部いただきます」

言っつて、ローブの袖に魔札を引っ込めた。再び手を袖から出すと、別のカードを持っている。

「代わりに、コレ。差し上げます」

渡されたカードは 劫火。見たことも聞いたこともない魔札だ。

「先日、クエストを受けまして、フレキアス大陸の【火の真理】に行つて来ました」

「あのがっかりエリアか？」

【火の真理】等級？。トップクラスのプレイヤー達が団結して挑んだこのエリア。モンスターは等級？レベル。ダンジョンは地下20階。特殊アイテムなし。という、なぜ等級？なのかわからない、がっかりエリアと呼ばれている。

「クエスト自体は15階以下で入手できる 炎 の大量入手でした。もちろん一人で行きました。等級？レベルのモンスターは雑魚でしかないので。ですが、16階。魔札の練習といいますが、時間短縮のために、壁抜けで階段まで直進してましたら、隠し部屋。見つけました。本当に偶然です。そこにこの魔札が一枚だけおいてありました」

ためらわずに持ってきちゃいました。とアインは楚々と笑った。

「だってあなたにぴったりだと思ったんですもの」

「前から何度も言っているが・・・」

「わかってます。これは自己満足です。好きな人に尽くしたいって言う、私の自己満足です」

だからクレハはアインが苦手だった。

「ですから、そんな顔をしないでください。都合のいい女がいるくらいでいいんです。たまに食事に誘っていただけたら嬉しいは嬉しいんですけど」

それでは。とアインは席を立った。

クレハはため息をひとつつくとアインに声をかけた

「今日の夕方6時半に駅前噴水広場。俺が持つからお金は心配しなくていい」

10秒、20秒、30秒してアインは満面の笑みを浮かべて振り返った。

「はい。あ、えっと。向こうの時間で今5時ですから、あぁっ！私一度帰ってきますので、先に上がりますね」

パタパタと去っていくアインを見て、クレハは再び思いため息をついた。

「羽柴のところにねんらくしないとな・・・。」

閑話 ある人物達の会話

閑話 ある人物達の会話

「中堅プレイヤーの中に最高位の魔札を手に入れたものが出たよ
うだの」

「劫火の魔札は入手は容易なほうですから、やっと。とも言
えます」

「相変わらず君は厳しいのお」

「そんなことはありません。彼らは頭が固すぎるんです」

「我々、クローズ組も、皆が皆、思考が柔軟というわけではない
がね」

「逆に彼らの中にも、思考の柔軟な物がいる事実もあります」

「今のところ特筆すべきは、《影法師》と《紅剣士》かの？」

「そうですね。特に《紅剣士》は、大量制御に早い段階で気づい
たみたいですし」

「らしいの。簡単なことなんじゃが、なぜ皆気がつかんかのぉ」

「それこそ簡単なことですよ。皆”武器”で戦うという前提があるからです。戦闘なんて現実まじりじゃ経験しないんですから」

「まあ。しかし、だからこそ気づいてもいいと思うのだが、戦ったことないのだから、身体のスペックを真つ先に上げておくということに」

「大量制御の基本は、《知覚》と《思考》の《加速》と《強化》ですからね」

「たつたそれだけじゃよ。それだけで後はどうとでもなる」

「話を戻しますが、《紅剣士》のことです。劫火 は彼の元に行き着いたみたいです」

「火 の12枚から 劫火 1枚に減ることで、《紅剣士》はなにをやってくれるかのお？」

「きつと、劫火 にさらに 火 を足すとかではないですか？」

「もっと上を目指すか。ふむ、ありえるの」

「そうになると、うかうかしてられませんね」

「わしらも古参組として、さらに先に行かねばいかんか」

「ですね。等級??。もぐりますか？」

「【神の御所】か。あそこは錫杖だとつらいんだが・・・」

「私の本よりはいいでしょう」

「前から行っておるが。いい加減その、”本で殴る”は効率面を
考えてやめたほうがよくないか？」

「いいんです。好きなんですから」

「ならいいんじゃないか・・・」

第5話 猫の尾にて

第5話 猫の尾にて

樹市（イツキ市）にここ数年で人気の出てきているレストランがある。

レストラン 猫の尾

4階建てのレストランで、高級ともファミレスともいえる。1階から4階まで対象としてある客層を分けることで、どんな客層の人でも受け入れる。それにより、客を取りこぼすことがなくなり、人気も次第に上がってきたのだ。

火村^{ヒムラ} 紅葉^{モミジ}は携帯を閉じて時計を見た。6時。30分前だというのに、何で彼女は息を切らせて駆けてくるのだろう。紅葉はハンカチを用意しながら、今日何度目かわからないため息をついた。

「影山さん。そんなに慌てなくてもまだ時間はあったのに」

影山^{カゲヤマ} 一海^{カズミ}。RVTにおいてアインと名乗る者の現実での名だ。容姿はアインとまったく違っていいほど変わらない。故に胸は残念だ。・・・残念だ。

「いえ、待たせるわけには行きませんか」

呼吸を整えながら小さく微笑む姿は、深窓の令嬢といった様だ。

「……………。今度のはいつまで続くんです？ 『殿方に盲目的に尽くす令嬢』でしたか。はっきり言って、素のあなたを知ってるので鳥肌しか立ちません」

「……………。なんだよ。いいじゃんか。実際、お嬢様なのは間違っ
てないんだしさ」

一転。深窓の令嬢からおてんばお嬢に豹変した、一海が口を尖らせる。

「K2グループの社長令嬢なのは事実でしょうが、あなたはお嬢様というよりも”お嬢”でしょう。どうやったら純粹培養のごとき箱入りで、あなたのようなおてんばが出来るんですか」

「褒めるなよ。照れるじゃないか」

「褒めてません。それにあなたが照れる様なんて想像つきません。
……………まあいいです。行きますよ」

眉間のしわを揉み解しながら紅葉が歩き始めると、一海が慌てたように横に並び腕を絡めた。

「今日くらい、彼女のように振舞ってもいいですよね？」

「はあ。かまいませんよ。まったく、何でそんなに演技したがるんだか」

紅葉の呟きに「何ででしょう」と微笑む一海は深窓の令嬢そのものだった。

駅から徒歩で五分。レストラン 猫の尾 の4階。VIPルームに二人は通されていた。

「坊ちやま。お久しぶりでございます。日々の食事はきちんととられていますか？」

メニューを小脇に挟んだ老執事がにこやかに紅葉に声をかけてきた。ネームバッチには《オーナー》柏木 とある。

「久しぶり、柏木。最近は繁盛してるみたいだね。食事はそれなりにとってるよ」

柏木 カシワキ 齊蔵 サイゾウ。数年前に引退するまでは、執事としてある屋敷に使っていた。引退後に趣味で 猫の尾 をはじめる。紅葉の幼いころを少なからず知っている。それゆえに、紅葉を孫のように思っているのだ。

「メニューは適当にお願い。影山さんは食べれない物とかはある？」

「え？ええ、いえ。好き嫌いはありません・・・」

柏木は「かしこまりました」と一礼し、VIPルームを出た。

「さて、料理が来るまで少し時間があるだろうから、情報交換と
いこうか？」

「いや、頼むから。その前にいろいろ説明して。お願いします」

返事を返していはしたが、理解が追いついていなかったらしく、
一海は頭を抱えてテーブルに突っ伏した。演技もままならず、素の
状態だ。

「簡単に言えば昔の知り合いで、今でも孫みたいにかわいがって
くれてるんだよ。いい加減、坊ちゃんはやめてほしいんだけどね」

「きつと、多分だが、おそらく、お前のほうがいいとこのボンボ
ンだ。私なんか比じゃない」

一海はぶつぶつと愚痴を（いろいろとやるせなくなったのだろう）
こぼしながら、カバンから手帳を出した。

「はあ。こつちが最近仕入れた情報だと、古参。いわゆるクロー
ズ組が何かしらの情報を独占してるらしいってこと。エリアの存在
のいくつかも新しく発見されてるんじゃないかと思ってる」

「各大陸の平均エリア数が13だったか。確かに、いくつかの大
陸は10を下回っているが、未開マップはないだろう？」

「派生エリア。噂はほんとだったんじゃない？」

一海の言葉に紅葉は腕を組んで考え込む。一時期、プレイヤーの
中で噂されていたことだ。エリアのいくつかに存在している、不可

解な進入不可能域。自然そのもの、世界そのものを再現しているが故に出来るデッドスペースだといわれているスペースから、別のエリアに繋がっているというものだ。

「噂に噂を重ねても仕方がない気がするが、候補に入れるべきですね。俺が予想するなら、劫火 みたいな魔札がまだ沢山あることかな。もしかしたら 劫火 も、本来は大量にあるんじゃないのか？」

「とりあえず、覚えといてくれればいいよ。あと、もう一個。お前、この間女プレイヤーのコンビ助けたろ？」

手帳をカバンにしまいながら、ジト目を紅葉に向ける。

「よく知ってるな。どこ情報？」

「そのコンビ。うちのクラスの三島と北大路。二人が教室で話してたよ」

急に紅葉から表情が消える。

「北大路・・・ね」

「ん？どうした？」

紅葉の顔を覗き込む一海は、どこか軽い雰囲気のある普段の紅葉との違いに違和感を感じたのだ。

「・・・なんでもない。さて、そろそろ料理も来るだろう」

表情を戻し、話はもう終わりといわんばかりに、一海に笑みを向けた。言外に演技はいいのかと知っているようだ。

「……………。料理楽しみですね。2階には伺うのですが、4階なんて初めてですので楽しみです」

深窓の令嬢としての笑顔を浮かべて、再び演技に入ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2019w/>

RVT

2011年10月10日11時06分発行